

## INPEに参加した浅井健介会員に学会の様子をうかがいました！

(インタビュアー：国際交流委員・岡部美香)

岡部：INPEに最初に参加したのはいつですか？

浅井：2015年、私がDIの時でした。夏にポーランドのワルシャワで大会があって、そこに初めて参加しました。

岡部：参加しようと思ったきっかけは何でしたか？

浅井：大会に「翻訳と教育」をテーマとするプログラムがあって、それに関心があったので参加しようと思いました。

岡部：INPEの大会は、2年に1回、開催されるのですよね。大会に参加するにはどのように申し込んだらよいのですか？

浅井：申し込み方法はINPEのホームページに出ています。発表申し込みや入会をするのに紹介者は必要ありません。INPEで発表するなら、入会している必要があります。会員だと大会参加費が安くなる、という仕組みになっています。学会誌も送られてきます。

いちど会員になった後、会費を払わなくなったら、会員資格が一時停止されるみたいなのですが、特にメールで会費が未納ですってという連絡は来ません。自分で会員資格を更新していくシステムなんだと思います。

会員資格を更新しなくても、メールによる連絡はずっときます。大会の広報ペーパーとかの。つまり、大会の情報などは共有できるので、関心のあるテーマのプログラムが大会で開催されるときに会費を払って資格を復活させて参加するということも可能です。

岡部：大会に参加した時のご感想をうかがえますか？

浅井：一日のセッションがすごく長かったです。だって、参加すれば、ご飯やおやつがついてくるんですよ。朝行って夜帰るまで、ずっと。ディナーはない時もあるけれど。つねにコーヒープレイクが長い時間あって。あの時間がすごく貴重だなと思いました。

ひとりで参加している方で、周りは知らない人ばかりでも、そのコーヒープレイクの時間にいろいろな人たちとかなり話すことができるんです。ひとりでコーヒー飲んだりいろいろ食べたりしてたら、本当にみなさん、気さくに声を掛けてきてくれるんです。さっきのセッションどうだった？…っていう話ができます。たとえ、セッション自体を自分が理解できていなかったとしても、その人がどう考えたかみたいな話を聞いて議論できたりもします。ただ学会のセッションに出席するだけじゃなくて、その後や休憩時間にいろんな人と交流できる機会があるので、そこがすごくいいところだなと思いました。有名な先生とかでも、ただの学生みたいな僕と気さくにいろいろ話してくださったりとか。

結構、大会会場の出入りが自由で、抜け出して街を歩いてたら、大会で見かけた人とバスで会って一緒にしゃべりながら歩いたり…みたいなこともありました。ホテルの朝食でずっと昨日のセッションについて話したりみたいなこととかも。みんな同じようなところに泊まっていますから、そういう機会もあるのがいいかなって思います。

INPE は、特定の国に事務局がないので、英語ができなくても、英語ができないのは当たり前だから気にしなくていいよ、みたいな雰囲気があって、つたない英語でもよく聞いてくれる方が多いという印象があります。海外の院生さんにも、積極的に交流しようっていう方も多いので、大会に行っても誰とも話すことがない、なんてことにはならないんじゃないのかなって思います。

岡部：ほかに、参加してよかったと思ったことはありますか？

浅井：発表の時、発表者と質問者のやりとりに留まらず、フロア全体につねに議論を開いていくところがすごく多くて。多分、日本の教育哲学会だと——それがいいところでもあるんですけど——専門的な話に行きがちなのに対して、INPE では、専門的な教育哲学の議論が具体的な文脈のなかでどういう意味や作用をもつかなど、自分自身の経験を絡めながら議論されることがしばしばあります。「あなたの発表に関連して、自分の国では／国際的には～な状況がありますがそれについてはどのように考えますか」というような質問が飛んでくるんです。テキスト解釈もするのですけれど、その上で教育や人間の生に関する具体的な問題をどう考えるかっていう議論が多い印象があります。だから、自分の研究していることを含め教育哲学の専門的な議論が実践的な議論、特に国際的な実践の議論とどうつながっていくのかを考えるにはすごくいい機会だなと思いました。

岡部：確かに、INPE はシンポジウムのテーマも、まさに今、問題になっている時事問題みたいなものと関連していることが多いですね。

浅井：必ず関連しています。今日的な課題に関連していない議論って、むしろほとんどないんじゃないかなって思います。例えば、今だったらコロナとか、パンデミックとか。その前は、*Education, the Environment & Sustainability*でした。僕が参加したワルシャワの大会の時は、翻訳とか多文化理解とかがテーマとして設定がされていました。どの発表者・参加者もそのテーマにある程度、関心をもってやってくるので、それぞれの哲学の専門を踏まえながらも、同じテーマに沿って議論しやすいんじゃないのかなって思います。

岡部：参加したいなと思っている人にアドバイスがあればうかがいたいのですが。

浅井：英語がちょっと苦手だっていう意識があっても、気になくて大丈夫です。発表スタイルもいろいろでパワーポイントで発表する方もいますし。例えば、日本の教育哲学会みたいに、発表原稿をそのまま読み上げる形もあって。発表原稿に基づいて質問されることが多いので、質問の内容も十分に把握できると思います。また、ひとりで行ったとしても、他の方と交流できるような仕組みを向こうがつくってくれています。ディナーやランチ、コーヒーブレイク、エクスカージョンのような交流の機会が、毎日ありました。誰かと一緒に連れ立って参加している人は自由に観光に行くんですけども、ひとりで参加している人や特にその日の予定がない人はエクスカージョンに参加して、他の参加者と一緒に観光すると、現地の引率者が解説もして

くれるし、お食事とかも一緒にするので、とてもよい交流の機会になっているんじゃないのかなって思います。

学会の時に観光するっていうのは、大事なことだと思います。イスラエルの大会のときも、大会プログラムにも現地のイスラエルの問題に関係するようなものがたくさんありましたし、現地に行って分かるようなこともたくさんあったので。

あと、「アーリーバード」というシステムをうまく活用したらよいです。早めに大会参加費を支払うと少し安くなるというシステムです。国際学会の大会参加費って、特に大学院生さんからするとかなり高いんですよ。おそらく毎日のコーヒブレイクと昼食の代金が、たまに夜の夕食やパーティの代金が入ってるからというのもあるのでしょうか。

また、大会開催校のほうからホテルの案内が届くと思うんですけども、そういうホテルは結構、高いところが多いので、自分で安いホテルを予約すると、朝食と夕食とホテル代と、あとは大会参加費だけで暮らせるので、トータルで見ると、それほど高くないかもしれないです。

とりあえず、大会に参加を申し込んで、ホテルさえ予約できていれば、あとは何も心配事はないかなって思います。

(このインタビューは2022年7月7日に行われたものです。)

※『教育哲学研究』第86号(2002)に丸山恭司会員の「教育哲学者国際連絡会・第八回大会に参加して」(pp.32-36)、『近代教育フォーラム』第26号(2017)に松枝拓生会員の「INPE参加報告」(pp.156-158)が掲載されています。発表形式なども書いておられますので、そちらもあわせてご覧ください。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyouikutetsugaku1959/2002/86/2002\\_86\\_32/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyouikutetsugaku1959/2002/86/2002_86_32/_pdf/-char/ja)

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/hets/26/0/26\\_156/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/hets/26/0/26_156/_pdf/-char/ja)